

世界の形成を阻むものと育むもの
—アーレントの思想を手がかりとして考える—

小山花子
(盛岡大学)

2020年の今、分断と孤立化を超える思想について語ることに特別な難しさが生じてしまったかもしれない。パンデミックの発生により距離 (distance) と隔離 (quarantine) とが合言葉となり、分断と孤立化との単純な反対物であるところの「一体」や「集団」はむしろ、克服の対象であるかのように見なされるようになったからである。こうした流れの中でいくつかの変化が突然に希求され始めたことの気味わるさ——テレワークなどの柔軟な働き方はなぜ今まで許されてこなかったのか？——については一先ず置いておくとして、状況を冷静に見つめれば、当然のこととして次のような問いが現れてくるはずである。分断と孤立化は今日、どのような新しい現れ方をしているのか。「一体」や「集団」は、物理的な意味ではなく、社会的な意味において、本当に過ぎ去った規範となったのか。本発表では、ハンナ・アーレントの思想を手がかりに考えていきたい。

全体主義について考察した思想家のアーレントによれば、分断と孤立化とは根の部分でつながっている。そして両者ともに、巧妙に作られたものである。分断は、イデオロギーの力を借りて行われる。ナチスの全体主義においては、周知のように人種主義が、そのイデオロギーであった。人種主義がもたらした帰結は、しかしながら、「支配人種」とされた人びとにおいてすら同時に孤立化を意味したとアーレントは主張する。なぜならイデオロギーを介した人と人との「つながり」というものは原理的に不可能であると、アーレントは考えていたからである。

アーレントによれば、イデオロギー (ideology) が依拠するのは「論理の強制力」である。例えばある「人種」が「劣等」である、ゆえに彼らは排斥されなければならないという「論理」は、それと全く同一の「論理」を有する人びとをつないでいるかのように一見思える。しかしそこに実は、人的なつながりというものが全く存在しないということは明らかであるとアーレントは主張する。なぜならこれらの人びとが従っている「論理」とは、独居者としての私 (わたし) に語りかけるものであり、他者を本来的に必要としないものだからである。アーレントの示した例によれば、「 $2 + 2 = 4$ 」という「真理」が人びとをつなぐ原理とは決してなり得ないように、イデオロギーの「論理」は決して政治的なつながりを創出しない。また、ある人がその「論理」を何回述べてみたところで、その人がより政治的な存在として認められるわけでもない。アーレントの考えでは、ある人が政治的な存在となり、政治的な「現れ」を果たすことができるのは、異なる他者の存在を通じてのみである。イデオロギーはこの点において全く非政治的なのである。

ナチスの全体主義は、政治をイデオロギーあるいはその「強制力」に還元し、孤立していても、あるいは孤立することこそが政治的なあり方であるという錯覚を植えつけた。しかし、前述したように単一の声しか響かない場所では、政治はあり得ない。政治

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

現象の根幹をなすのは、一致 (unanimity) ではなく、合意 (agreement) である。アーレントが後の著作『革命について』で力説したように、すべての人が同じように思考し、ただ同じことを述べるとき、そこには一致は存在するが、政治は存在しない。一方、人びとが異なる位置から思考し、意見を交わすとき、そこには合意とともに、政治の可能性が開かれる。合意は、「差異」や「複数性」とを前提とする概念であり、政治の現象は、これらのものと密接に関わっている。

翻って今日の社会では、どのような分断と孤立化とが見られるだろうか。この国において言論の置かれた状況は深刻なものであろう。ワイドショーの過激化は、フリースピーチの影響が強いアメリカや日本の文脈をいったん離れ、人種差別的な言論や扇動を禁じる国際法の観点から見たときには、危険なレベルにまで達しているといえる。著名な民放キャスターの発言における嫌中・嫌韓や、「犯罪者」のバッシングが中心の事件報道、異なる民族に対する優越意識や、排外意識を焚き付けるようなコメントやまとめの数々には恐怖を感じる。アーレントはその政治思想において、世界 (world) が人びとをつなぎとめると同時に分離してもいると述べ、人びとを集わせると同時に引き離すテーブルの比喻によってそれを表したが、上のような状況はまさに世界が遠景に退き、テーブルなしで人びとが集っている状態のように思われる。

では希求すべきは世界の再興かとかといえれば、事はそう簡単ではない。ここでアーレントに沿えば、画一主義 (conformism) の問題に我々は直面する。画一主義とは、ある人が隣の人と全く同じ仕方で物を見ること、あるいは隣人のパースペクティブを自身のものとしてそっくりそのまま用いることである。画一主義が到来したとき、他者は消え、世界は消え、その人自身も政治的な意味においては消滅することになる。共通世界は、孤立 (isolation) のみならず、画一主義によっても消失するとアーレントは述べていた。分断と孤立化とを回避しようとするベクトルが、もう1つの極として画一主義に走ってしまっただけでは元も子もあるまい。今日の困難とは、一方での分断、孤立化と、他方での画一主義、集団主義とが渾然一体となって、人びとの行き場を塞いでいるところであろう。

こうしたベクトルのいずれとも区別される、共にあること (togetherness) とは、アーレントによればどのような状態であるか。それは世界という、「間にあるもの (in-between)」によってつながれる状態である。この世界、あるいは「間にあるもの」は、いわば生身の人間を含むものではない。自己と他者、そして両者がそれについて語り、また働きかける物的な何かとの間の三角関係が、そこでは必然的に前提されている。今日深刻な差別の問題とは、それが we/they という集団的な二者関係に陥っており、間に介在物——法や政策、あるいは行為でもありうるがいずれにしても非人格的な何か——を立てることに失敗しているところにあると、アーレントを延長するならばいえるだろう。

分断と孤立化とを克服することは、人びとが一つになるようなユートピアや、あらゆる対立の消滅を意味するのではあるまい。連帯は、ある種の「距離」そして「個」の領域の確保、またそこから生じてくるはずの差異や緊張とを意味するはずである。と

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

ころが我々の社会は、これらの事柄についてただ冷静に語ることすらできかねるような状況に陥っている。

なおアーレントによれば、イデオロギーの種類は、それによる世界の喪失とは必ずしも関係がない。あらゆるイデオロギーは、常識のはるか彼方までその結論を追いつめて行ったときに、無世界的なものと化すとアーレントは考える。人種主義や共産主義だけとは限らないと、アーレントは著作の中で念を押しているのである。今日の世界を見渡すと、民主主義や自由主義などの主義や思想が一見ポジティブなものとして評価を受けている。しかし、病気や苦痛を持つ人に常に笑っているよう奨めるような類の「自由主義」あるいは「個人主義」は行き過ぎたそれであり、アーレントの指摘が当てはまり得る危険なレベルに到達しようとしている。また選挙によって作り出された「多数派」を絶対視するような「民主主義」は、独裁という古くて新しい問題を突きつけている。